ビンヨウ28、281

(1) 備陽史探訪　　1985年12月11日

備陽史探訪

No. 28

発行
備陽史探訪の会
会報編集部

編集局
〒720
福山市川口町
398-13
種本実方

1985年12月 たいへんおまたせ号

1頁、終戦のころ ―あの時私は― 小林田鶴子
3頁、その時私は釜山桟橋にいた 立石雪夫
7頁、「ギブ・ミー・チョコレート」のジェネレーション 神谷和孝
8頁、ケネディ暗殺事件 森 紀子
10頁、村上一郎さんのこと 東田東Q
12頁、歴史的大事件と私 吉田和隆
14頁、新聞切りぬき版(7・8・9月) 編集長
16頁、編集後記 下請け業者

特集 あの大事件のころ 私はこうしていた!

▲終戦の頃―あの時私は―▼

小林田鶴子

真赤な太陽が草原の地平線に沈む南満州(現中Q東北地区)の鉄嶺(テツレイ)という処に住んで居りました。四十年経っても頭から消えない出来事でした。何処の家も仇き盛りの男性はすべて召集され残った男の人と言えば老人と子供ばかりとなりました。子供を連れた母親は、わこの国民を殺してはならぬと避難命令が出ました。当時安全地帯と申せば朝鮮です。だが南も北も一杯となりついに北支へと云う事になり準備丈はしても一向に動く事は出来ない毎日でした。或る日突然夜中にソ連軍が越境をして北満に攻め込みました。すると奥地に住んでいた人達や開拓地の人達が昼夜を通して空・陸から

(2) 備陽史探訪　　1985年12月11日

攻められつつ貨車でどんどんと南下して来ました。私の家で婦人会や手のあいた人はすべて動員され、おにぎりを作る人、運ぶ人と手分けをして避難列車まで徹夜で作業が続きました。

でも避難先が満杯となり、ついに鉄嶺市中や学校も避難の人で一杯となりました。

大陸は夏の昼はアスファルトが流れるように暑く夜は寒く、その為無蓋車で運ばれる道中にシート等で被って朝シートを外すと何人かの幼児が窒息死をしたと聞きました。私の家は軍納もしていましたので八月十二日夜中に軍から㊙の電話が入り停戦協定が成立したので…、と聞かされ、それまで子供を連れて、と胸が痛くなる程つかえていたのが急にすーっと下ったのを今でも忘れません。負けたにしろ戦争は終った！何とあの時程喜しかった事。だがそれからが大へんでした。

玉音放送を雑音の中で聞き、くやしさと安堵の中で防空カーテン（若い方は知りませんね。外を黒布　内を赤布で合せ縫い）防空電球（球の下だけがかすかに明るい）を取り外した処、又付けねばなりません。ソ連が南下し、三日程して八路（パーロ、現中国軍）が北上して来ました。

数日して日本は負けたのだから電気も水道もやらなくてよいと、切られてしまいました。そして満人の暴動が起り、軍隊官舎は市民より早く避難をしていたので空家同然ですから畳や家財を奪ってゆく人が後の行列のようでした。それを見ていましたら突然にピストルの音がして、行列がパッと散り・満人の死体が路上に二体。瞬時のことでした。ゲーペーウー（スターリン直属の治安隊）が奉天（現瀋陽）へ南下の途中でした。それ以来日本人は略奪に合いませんでしたがソ連人には、日・満、共に酒断禁物でした。

今日が何日で何曜日か全く判らない毎日となりました。若い女性は坊主頭にした人が沢山いましたが　やはり後姿を見ればヒップでね。

四六時中ドアはバリケード。内、鍵をしていても何時ソ連人が這入ってくるかわからず、来れば子供を抱いて屋根裏や地下室に隠れ、無信人者でも子供が泣きませんように、口スケに見付かりませんようにと祈るばかりでした。

二十一年の早春に国府軍（現台湾）が進駐をして来て、ソ連も八路も追い出して一応平静となり、進駐地帯順に帰国が出きるようになりました。鉄嶺は避難民と元軍人と城内に居る人が六月一日から三日迄に、市街地は四日、駅周辺が五日と決定。私の家は四日早朝出ました。駅前広場は一列に関所が設置され、一小隊別に分れ男女別々に一人づつ関所に入って高校生四人一組に検べられ全員が済みましたのは夕方の時頃でした。皆が最小限十貫なのに沢山没収されて、馬車二十台程の衣類の山を見送って溜息と共に乗込みました。貨車の中央に荷を壁の形で置き両側に三角ケーキの箱詰めの形で据って眠る毎日の始りです。道中運転士が神の下を請求出きないことから気罐車を外して渡もない草原に二度も置きざりにされ、団長さんも皆から集めて交渉をしたり、又途中二回残った社宅に話

No.

められ名簿の書き換えをさせられたり本当にお気の毒でした。コロ島の埠頭、広場で荷物再点検、シラミ退治のDDTを頭、胸、背中と噴射され、髪を洗って出ても社宅で畳一帖に五人では一本の毛を縄渡りで移動ですからね。

さあ乗船命令が出たがアメリカのLSTで、しかも沖縄へ上陸した舟艇と聞き、皆一様にここ迄帰って来て今度はアメリカに連れて行かれるのかと足が竦みました。すると甲板から「皆さん アメリカの舟ですが船員は全員日本人です心配いりません よ、日本に連れて帰って上げますから」皆一斉に涙がこぼれて重い荷も軽くタラップを昇りました。東支那海の大波を体一杯に感じて二十七日に博多に入港しました。

少数の軍人の野望から国民の大きな犠牲を払って やっと平和になったのも束の間。核問題で大揺れの今日。若い人達どうぞ世界平和の維持をお願いします。そして先祖の生活や、社会形成の口マンを求める備陽の会の楽しい旅が続きますことを祈りつつペンを置きます。

＊　＊　＊　＊

知ったるケ・コーナー

古墳部会長・佐藤一夫氏がついに結婚することになりました。あの毒舌しか出てこないと思われた唇から、どの様な愛の言葉がささやかれたのでしょうか。まっこと興味のあるところです。式は1月12日、出立は15時29分大阪行こだまです。ヒマな人は見物に行きましょう。

（みおくり軍団）

その時私は釜山桟橋にいた

立石雪夫

81年（昭56）三月以来引き続いて「中国残留孤児」が来日している。私はこの人達の姿をニュースで見る度に怒りではらわたがかきむしられる思いがする。この孤児達の四〇年の歳月は、どんなにか長く悲しい歳月であったであろう。

実は私は、その四〇年前にこの人達を中国へ見送った人間なのである。釜山桟橋から列車に乗せて送った満州開拓団の乳児幼児たちの瞳を私は忘れる事ができない。テレビや新聞の四〇歳から五〇歳の肉身探しの憂いにみちた顔、その中に私が釜山で送った幼児がいるのではないかといつも思う。

45年（昭20）一月から終戦まで私は交通公社の職員として、釜山桟橋事務所で働いていた。交通公社といえば旅客の快適な旅行ができるように諸事の斡旋をするのが仕事であるが、この時期にはそんな事どころではなく、ひっ迫した戦局のもと、戦時国策輸送の一端を担って働いていたのである。

当時釜山の第一桟橋は、日本列島と大陸をつなぐ最も重要な輸送拠点で、毎日毎夜行き交う人の群れで大混雑をしていた。しかし以前から六隻あった関釜及び博釜連絡船は、次第に減って45年（昭20）には僅か二隻（興安・徳寿）となり、それも朝鮮海峡の敵潜のために欠航しがちになっていた。海上の状況を見て海軍武官府か

ち通知のあり次第出航するのだから、それが夜だろうが昼だろうがお構いなく待機中の船に待機中の客を詰め込んで出航する。毎日のように航機が采配し主として機雷を投げる。下からは一斉に高射砲を撃ち上げる。桟橋に横づけしていた駆逐艦の艦砲の音で私達の事務所の窓ガラスはとんでしまい、寒風の吹きすさぶ中で仕事を続けている始末だ。

待機中の旅客と言えば恰好はいいが、いつ出るとも知れぬ舟を待って桟橋の野天で、"負担の列をつくって夜も昼も雨に打たれ露とごみとにまみれて寒さにふるえ、金も無く食うものも無く実に惨たんたる状況には目をそむけたくなる。

なかでも開拓団の人々は最も気の毒であった。一週間ぐらいも船待ちをした開拓団員達が釜山に上陸した時は殆んど意識朦朧として、指先でも軽くついただけで将棋倒しになりそうなひとむれの姿である。それでも、弱った老人(息子がいい出した満州行きをきっと反対したであろう)を負い、空ろな目をキョロキョロさせた子供達の手をひき幼児を抱いて、同じような家族団が20人30人とひとかたまりで続く。私たちは、何千人ともなく一度に湧き出るように船から降りてくる旅客の大群衆の中から、計画輸送のリストに掲載されたいくつかの開拓団(リストに載った団体は他にも沢山あり皆私達の仕事だが今回は開拓団だけを問題にする)をすばやくキャッチして列車へ誘導し、できるだけ楽な席のとれるように世話をする。私達も一度にドッと仕事が押し寄せるのであり、しかも極く短時間にらちがあけなければならないのだから目は血走っているにちがいない。それでも発車まで時間のある限り、こちらの勤務内容には無い事まで開拓団にはあれこれ面倒を見てあげた。戦時中の苦しい長旅の末やっと着いた港での何日間もの雨露と飢えの船待ちの野宿、乗った船では、船が撃沈された時の朝鮮海峡へのとび込み訓練での疲労と恐怖、灯火管制でデッキにも出させてくれず、船底の三等船室に詰め込まれて暗の中で船酔いに苦しんだ末、気息奄々、生色もなくやっと着いた大陸のとつきの釜山港である。飼料用とうもろこしに飯粒が多少混じっているような駅弁食べ乍らの旅はまだ長い。できれば一晩釜山で畳の上で寝せてあげたいがそれはできない。計画輸送を乱すからである。しかし私は時々それをやった。それは、余りにひどい状態である時、そして広島県出身の開拓団である時に限ってではあった。この私の身びいきは許されたい。釜山に満拓会館という団体宿泊のできる施設があり、自分でそれに連れていって寝させ、翌日稍元気になった人達を無事送り出してあげたのである。そのため私自身かなりの無理をした事はいうまでもない。

私の扱った満州行きの旅客団体は他にも沢山あった。青少年義勇軍、各種口演会社の新入社員団、大陸の花嫁団(満州の成長した義勇軍の若者の花嫁になる娘さんの団体)や各種前線慰問団等色々である。その中で私が特に開拓団に親近感を持ち同情を禁じ得なかったのはなぜだ

ったか。まず一般的に持つ家族連れへの親近感である。しかし、ただの家族連れではなくて、日本内地におけるどうにもならぬ貧農の苦しみから脱却するために家内中悩んだ末の決意で満州開拓の困苦に立ち向かおうとしている家族集団、その悲愴感への敬愛というか同情感である。さらに何よりもかによりも、当時の戦況から考えて、この人たちの満州行きは、行って楽土を築くどころか老幼共々に直ちに死地に赴く事になりそうなという不安感なり危機感が私の胸をちらちなかったからである。

釜山桟橋というのは不思議な所であった。大陸往来の大物小物が私達の世話になって通過していく。世話になったのだから物と情報を内密に流してくれる。国民は政府や大本営の嘘放送を信じていたが、私は知っていた。連合艦隊が既に幻になってしまっている事も、44年(昭19)末頃から連が対日戦準備をはじめた事も、対ソ戦に備え泣く子も黙ると最強を誇っていた時でさえ、ノモンハンで大敗北(これも秘密だった)を喫していた関東軍であったが、その関東軍の殆どは南方の対米戦用に廻され、現在の関東軍は訓練も不充分兵器も粗末な補充召集の弱兵軍が主である秘密も皆知っていた。特攻・攻撃を44年からはじめたがそれは他に手段が無くなったからであり、それ自体既に断末魔的様相を物語るものであった。飛行機もガソリンも、船も兵力も、食料も何もかもお手上げの状況である事も知っていた。満州や一部華北地方からは、軍人、軍属の家族をどんどん日本内地へ引き揚げさせていた。これが何を物語るものかは一目瞭然の事である。この戦争はこと、し秋までも持てそうにないと私は思っていた。敗けにきまった戦争だのになぜ開拓団を送り込んでいくのか。それとも戦争は敗けても日本人の満州開拓は可能だと思っているのか。釜山桟橋で働いている一私人である私でさえ、目に見、耳に聞える材料だけで既に戦局の行方は明らかであった。政府や軍の中枢が知らない筈がない。私には、無能な彼らが、時局収拾の力もなく一億玉砕を呼号する陸軍を押さえることもできず、惰性の戦争を続けているに過ぎないと思った。何が「天祐」だ。何が「神風」だ。何が「赤子」のように慰し召されるしだ。老幼を含めた莫大な家族を「王道楽土」を信じさせて、衰れにも死地へ投入していく悲惨な輸送の手伝い業務を交通公社がやらされているのである。軍人家族は交通公社の手を通さず軍自身が送還輸送を指揮している。その側をすりかえに我々の手で開拓団は北上する。「畜生奴」とか「畜ッたれ奴が」と小声でつぶやきながら、それでも業務だからやらねばならない。この胸に燃える憤怒を口には出せないのである。不用意に誰かに話せば直ちに手が後ろにまわるのである。釜山桟橋には憲兵や警察また軍機関がうようしており、人を信じて話せばどこかで密告される。現在富山市に健在し文通もしている当時の同僚のN氏とだけは話し合っていたが、他には誰にも言えなかった。

コピー-105D(64×44)

(6)備陽史探訪

1985年12月11日

八月に入ると空襲と敵潜のために釜山港は放棄せざるを得ず、今後は北朝鮮航路に切り換えるということで、我々も元山へ出張して宿をとり、空襲を受けながら毎日待ったが遂に船は入ってこなかった。それどころか、八月八日にはソ連が対日宣戦をやり、満州や北朝鮮になだれ込んで来た。全く私の予想どおりである。私はついこの間列車に乗せて北上させた開拓団の人々のことを思った。彼らはやっとたどりつくや否や戦場の渦の中に巻きこまれたのである。逃げまどい或いは傷つき殺されたりしているであろう子どもたちの事を思い私は胸が痛んだ。この怒りをどこへぶつければいいのか。

私は上陸したり連軍から追われて列車で避難する羅津、清津方面からの日本人難民らのすし詰めの中に割り込み、ソウルを経由して釜山へ帰った。釜山駅に着いたのは八月一五日の10時頃であった。

九月五日、交通公社員は釜山事務所に集合させられ、朝鮮支社解散の伝達を聞いた。釜山事務所長である初老のO氏は、まさに声涙共にくだる底の演説をやった。その中で忘れ難いことばが二つある。その一は「国体護持」即ち天皇や天皇制を守り抜こうということであり、いま一つは「一億総懺悔」ということであった。所長は皆の尻のだるいことも構わずに繰り返し繰り返し二つの事を述べた。私はこの期に至って「天皇制護持」には何の感動も無かった。しかし許せないのは「一億総懺悔」であった。戦争指導者共が、天皇やこれらに向かうであろう戦争の責任追求を少しでも逃れようとして「国民皆自分が悪かったと思え」と全国津々浦々に流した、卑怯きわまる責任回避の手管であり小細工であった。その無責任さは今日の政治の系譜にその侭受け継がれており、中国孤児に対する国の政策も それが「国の責任」であることを極力回避しようとしているのである。

お願い

会報編集部では皆さまの創意工夫を紙面作りに生かしていきたいと考えています。こういったテーマで特集を組んだら面白いとか、こんなコーナーがあれば良いとか、思い付いたことは何でもおしらせ下さい。

＊　＊　＊　＊

(P11より続く)

あろうこの村上さんの言葉は私にはつらかった。ああ、思うことの十分の一も言えずに、生きてある身の有限であることの哀しさよ。顔がほてる様であった。

この風呂敷は その後長い間私の部屋の壁にかざってあり、当初は白かった文字もタバコのヤニで黄色く変色してしまって 今では押入れにしまってあるが 時としてその存在を思い出すたびに私は奇妙な痛みを覚えるのである。

ここまで打っている

(7) 備陽史探訪

1985年12月11日

「ギブ・ミー・チョコレート」のジェネレーション

神谷和孝

朝食をたべていた時、テレビから「ギブ・ミー・チョコレートし」の一言が耳に飛びこんできた。学校へ行く時間で、大急ぎで食事をとっていたので他の言葉は耳に入っていなかったのに、その言葉は妙に心に強くひびいた。どうやら対談をやっていて、そのゲストが自分の体験を述べた言葉の一部らしい。そのゲストの顔もチラッと見ただけだが、私と同年輩の人らしい。

私と同年代の人だったら(と言う以上、私が四十六才であると言わねばなるまい)「ギブ・ミー・チョコレートし」の一言に過去の何かを想い出さざるを得ないのではなかろうか。

敗戦直後の日本の状況を象徴する写真の中に、進駐軍の兵士に、ボロボロの服を着た子供達が両手を高くかかげてまとわりついている写真がある。彼等が口々に叫んでいる言葉が「ギブ・ミー・チョコレートし」と言う言葉である。年代的には、その少年達と私とはそんなに差がない。私には「ギブ・ミ・・・し」と進駐軍にせがんだ体験はないが、終戦直後に、戦死した父の遺骨(と言っても名前を記したのみの木片)をとりに大阪へ出掛けた時、胸にかけた遺骨に、一人の米兵が近づいてきて敬礼すると、一枚のガムを置いて呉れた事が、もうその時から四十年も経過するのに、生き生きと想い出される。

「ギブ、ミ・・・し」と叫んだ少年達に象徴される終戦直後に少年期を過した人々は、多かれ少なかれの差はあっても、苦労なしに育った人は居ないだろう。苦労したことを一つ一つ想い出して文章にしていたら紙面がいくらあっても足りないが、それらの苦労が姿をかえて楽しい想い出にさえなっているものが多い。

「ギブ、ミ・・・し」と叫んだジェネレーション(世代)は、もうそろそろ白髪のまじる年代になってきて、社会を動かす中心的な年代になってきた。社会的に中心層になると同時に、私達の世代が体験した事を、次の世代に語り継いでいかねばならない役割を持たされたのではないだろうか。

考えてみれば私も激動の社会の中で生きてきた。その中での特にいくつかの事がらは、自分の子供達にも是非話しておきたいと思う。今回の会報のテーマを、今まで私が書いた文章は解説したような結果になってしまったが、会員の皆様には、私の体験した事がらがそばにもよれないような体験を持っておられる方が多いと思う。

それらの体験を文章に表現していただいて、是非とも後世に残してもらいたいものである。

"ケネディ暗殺事件"

森　紀子

皆様は覚えておられるでしょうか。一九六三年(S.38年)十一月二十二日、時のアメリカ大統領ジョン・F・ケネディが、遊説先のテキサス州ダラスで狙撃されて死亡しました。忘れもしません、あの時私は入院中のベッドの中でこのニュースを聞いたのです。この年、五月に肺結核という忌わしい病名のもとに広島大学医学部より西条町の国立療養所に強制的に送り込まれました。大きな空洞が左肺にあり想像以上に重病でした。秋にはアメリカの大学へ留学が既に決定していました。十九才でした。私は被爆者というハンディキャップがあり、その上肺結核となってショックと悲しみでもう自分の人生はこれで終ったと思いました。しかし時の流れと共に、将来に希望が持てないすでも、日々の入院生活をそれなりにエンジョイ出来るまでになりました。入院中の私の楽しみは極東放送(F.E.N)を聞く事でした。当時私は相当アメリカ気触れていましたので、日本語放送よりも米軍が流すF.E.N放送の方が好きでした。しかもこの放送は二十四時間ずっと休みなしです。

その日も明け方四時過ぎに眼が醒めて何の気なしにイヤホンを付けるといつもと違う慌しいアナウンサーの声が耳に飛び込んで来ました。『プレジデント・ケネディ、アセイシネイティッド』ワズ三発の弾丸を受けて死んだという事です。私は聞き間違えたのではないかと思い、直ぐNHKや中国放送にチャンネルを合せましたが、まだ夜中なのでどの放送局も流していませんでした。今はもうほとんど忘れましたが、当時の私はか

なり英語が出来ましたので聞き違える筈はないと思い直し、同室の患者を叩き起してケネディの暗殺を知らせました。今にして思えば他の国の出来事に私の助言で安眠を妨害された彼女達には大いに迷惑だった事でしょう。

この事件は直ぐに容疑者としてリー・H・オズワルドが逮捕されました。二日後ダラス市警から拘置所に連行される途中ジャック・ルビーに射殺されて二重の驚きでした。副大統領だったリンドン・ジョンソンが代って大統領に就任し、ウォーレン委員会を設置させ、事件の解明に当らせましたが、犯人が一般市民に射殺されるという異例の出来事に真相は闇の中に葬られてしまいました。結局一年後のウォーレン報告書では、オズワルドの単独犯行で背後関係はまったく無かったと発表されました。しかし事件の関係者と目される人物が次々と怪死し、後味の悪い事件となりました。

もう二十二年も前の事でケネディの名前も忘れ去られようとしていますが、あの事件を思い出すたびにあの頃の悲嘆に暮れた入院生活を思い起こすのです。私は二年余りの闘病生活の中で絶望し、悩みながら無理やり自分の気持を捩じ曲げて、英語を捨てた痛恨の思いと、平凡に生きる道を選択した自分にこれで良かったのだと思う気持が今でも複雑に錯綜しています。渡米を断念し、夢想だにしなかった福山での平凡な生活の中で歴史と出逢い今はそれなりに充実した気持です。歴史を学ぶ事を快く見守ってくれる家族に感謝しつつ、あゝ今が私の遅い青春なのかも知れないとしみじみ思います。

村上一郎さんのこと

栗田東口

村上一郎さんといっても多分知らない人の方が多いだろう。いやあるいは圧倒的に「村上」姓の多いこの地方のことであるから「一郎さんと言えばあそこの村上のジイさんのことではないか」とか「隣の村上の長男は一郎といったはずだし」といったことは良くありそうなことと思われるが、え～い違うのだ。私の言う村上一郎さんとは歌人であり思想者である村上一郎さんのことである。村上一郎さんが日本刀による右頸動脈切断というかなり衝激的な死に方をされたのは75年3月29日のことであった。当時 電気屋一年生であった私は珍しく連休がとれたので水戸に行こうと思い列車の時間待ちのために入った北千住駅前の某喫茶店でたまたま手にした新聞でそのことを知ったのだ。その頃の私は新聞も取っていなかったし、TVも持っていなかったので これは本当にったまたまし が重なった出来事に属した。

「村上一郎氏、自刃」―新聞には村上さんの経歴、仕事そしてことが午後1時半ころ家人を全て花見に送り出した後に行なわれたこと、氏には躁うつ病の持病があり それが直接の原因ではないか等が報じられていた。

柄黒き刃を首に立たしめて
花繁き野に死なましものを

村上さんは吉田松陰の事例にならって「簡写」というものを作者のこころに一番近ずきうる道であるとしておられた。だから私は村上一郎歌集『壁攘』を買えば千円をこえるこのものであるのに一字一字たんねんに写してみたりもしたのだ。人は己れを律するの刃を常に背後に感じておらねばならぬ。だが「柄黒き刃」とは何事の比喩であるのか。また村上さんの背負わざるを得なかった「刃」とはどういった性質のものであったのか。―私は喫茶店をとび出し、村上さんの自宅のある吉祥寺へと向っていた。

私は村上一郎さんと特別の交流があった訳ではない。というより村上さんの顔さえ写真でしか見たことがない位である。ただ私の千々千な人生にもいくらかの波風はあり、その都度村上さんの文章は私の心に染みてきたというだけのことである。「日本の左翼は歴史を媒介として論を立てることがないからダメなんだ」と村上さんは言った。これがそもそも日本の左翼の「はしくれ」であった私が歴史に首をつっこむことになった始まりである。思えば村上さんの歴史論は歴史と志という一見異質なものの結合であった。たから自身認められるようにアカデミズムの徒から見るなら確かに書誌学的に弱いのだけれども、そこには歴史研究が専門化し細分化してゆくなかで忘れられていく「何故歴史か」という初源の問いに立ちかえり立ちかえりしてゆく「歴史者」の姿勢があった。別にべタべタまとわりついたり、月謝を払ったりもらったりするのだけが先生と弟子との関係ではあるまい。

歴史上には例えば「平田篤胤没後の門人」などといった訳のわからぬものさえある。だから村上さんは私の「先生」であるといっても良いのだ――

村上さんの家はすぐにわかった。住所で大体見当をつけたあたりに家人であるらしい黒い裏草をつけた人が一人立っていたからであり、どうやら家はその人の居るところの路地を右に入ったところであるらしかった。ここで私は少し気遅れした。先程から電車の中で考えていた「一体何をしに行くのか」という自問がまた頭をもたげてきたからであり、良く考えて見ればやはり何もしに行く理由などなかったからだ。「やっぱり家の前を通過するだけにしよう」そう思って、その男の人に軽く会釈して路地を曲った。村上さんの家は路地の奥の右側にあった。受付台のようなものがひとつ玄関の前に出ているだけで人影は見えない。「葬儀は今日じゃなかったんだ」開け放した玄関には黒い皮靴がちょう6人分、後で知ったのだけれどこの時内には吉本隆明や谷川雁など思想界の錚々たる連中が集っていたのだ、ああ恐ろし。そして何ということだろう　その路地は行き止まりであったのだ。

しばらく玄関先でためらったあと　私は仕方なく路地の入口へ引き返した。

「とうもこの度はゴニョゴニョ…」（葬儀のアイサツ程不得手なものはない）

「亡父のお知り合いの方ですか？」

「えと：あの：特に面識はないんですけれど」

「ああ『無名鬼』の読者の方ですね？」

「ええ：まあ：（『無名鬼』は一度しか買ったことがないんだけれど…）」

「……」

「あの良ろしかったら、お上がりになって…」

「あの：これ：こんなものに包んで：本当に失礼なんですが：」

私はいきなりカバンの中のノートを引き破ってポケットにあった一万円札を包んでさし出した。私の唐突さに若干驚いた風ではあったが、住所と名前をひかえ　告別式の日時はおってお知らせいたしますからというこの人の言葉もうわの空で　私は逃げるようにその場を去った。――醜態だ　醜態だ　俺は何という鈍くさい人間なんだろう。尊敬する人の死に際して気のきいた悔やみひとつ言えずに：せめて告別式の予定を聞いて又出直しますからとでも言えば良かったのだ　それを金を裸同然の形で押しつけてくるなんて：馬鹿もいいところだ　もう顔など出せるものか――

結局告別式には出なかった。半月程して村上家より香典返しとして　ていねいな礼状と紺地に白抜きで

生キテハ有限ノ身トナリ
死ニテハ無名ノ鬼トナル

と書かれた月旨敷が私のアパートに届けられた。おそらくは吉田松陰の「生きては忠義の人となり、死しては護国の鬼となる」をもじったので

（P6に続く）

歴史的大事件と私

吉田和隆

昔「タイムトンネル」というテレビ番組がありました。アメリカ政府の開発した時間旅行機が故障し、二人の科学者が色々な時代をさまようという設定で、なかなかの人気番組でした。

二人の時間漂流者は、沈没を翌日に控えたタイタニック号、あるいは全滅の運命にあるアラモのトリデとかいった、面白そうな場面、つまり歴史的大事件にばかりなぜか出現するのです。これが繁栄を謳歌するバグダッドの町とか、江戸(平和な)の長屋とかだったら四、五回で放送打ち切りになったんじゃないですか。

ヒットしたのは、歴史の一場面を映像で見てみたいという歴史好きだけでなく、歴史的な瞬間に、参加者の一人として立ち合ってみたい、という一般の人の要求を満たしてくれたからでは、なんて思うのです。実際、歴史に残るような大事件に、その場に居合わせて体験できる幸運な、あるいは不幸な人なんてほんの一握り(にぎ)にしか過ぎません。殆(ほとん)どの人は情報で知る事しかできないのです。

でもたまたま現場に居た人だけが、本当にその事件を体験したのだろうか。

「俺見たんだよ、きのう。すごかったぜー。死体がゴロゴロしてよー。」なんて言ってる人の方が、情報を沢山仕入れて、「昨日の爆弾事件は、日本の左翼運動の断末魔のあがきなのだ、そうなのだ。」とか分析している人よりエラいのだろうか。

いや、違う！深く直体験した人の方が深く時代を体験しているのだ。朝日ジャーナルを読もう。フォーカスを買おう。NHKニュースを見よう。

何を言いたいかわからなくなったので、私

の体験を書きます。

僕の東京オリンピック

お母さんが言った。「明日オリンピックを見に行くから先生に言ってくるのよ。」

僕はみんなに自慢した。「明日オリンピックに行くんだぞ。国立競技場に入るんだぞ。ウラヤメ。」みんなうらやましそうだった。

いい天気だった。電車に乗って出かけた。国立競技場が見えて来た。わくわくして来た。あれ？、通り過ぎちゃった。

「お母さん、入んないの？」

「切符があるわけないじゃないの。道ばたで見るのよ。」

あまわりさんが一杯立ってた。いやになる程待ったら、まわりの人がワーッと言って旗を振ってる。黒人の選手が走って来た。道ばたでスポンジを取って顔を拭くとポイと捨ててその儘走って行った。

「拾ってくるね。」「ダメよ汚ない。」拾わなかった。そのあと黒人や白人や沢山走って行った。

次の日学校に行くと、先生が言った。

「吉田君はきのうオリンピックを見に行きました。国立競技場でマラソンを見て来たそうです。お話してもらいましょう。」

僕は立った。お母さんがにくらしくなった。

あれから21年。早いものです。オリンピックは万博と違って僅か十日しかなかったから、実際に見れた人は、国民のほんの一部分だったと思います。切符はコネでもないと手に入らなかったようで、東京の人も殆どはテレビ観戦でした。

私の体験した歴史的事件は、二の位しかありません。平和な時代に生まれ育った事を感謝すべきなのでしょう。

新聞切りぬき版（今回は読売新聞より）

7月

3 福山の辻堂160棟確認ー福山文化財協会　駅家36 芦田16、加茂・山野各14等36町　主要道路沿いや峠・旧村境に多い。地蔵菩薩をまつる場合多

5 大化改新立役者の古墳？　奈良・巨勢山みどり台一号墳　横口式石槨　大臣クラスか

8 弥生中期の青銅斧　松江・西川津遺跡　国内初　大陸から伝来か

14 弥生前期に国産の絹　福岡・有田遺跡　日本最古　弥生前期に養蚕の技術があった、中国ー前2700年ごろ

16 石棺に線刻画　香川・善通寺弥生期遺跡　人の顔・模様描く　石棺にみつかったのは初

20 毛利の大名道を整備　山陰ー山陽を結ぶ萩往還（萩の毛利藩が参勤交代の為に作った道路・防府市三田尻まで53キロ）来年にかけ名所旧跡に石碑・説明板、道標が立てられる

21 銅鐸2個出土　島根・荒神谷遺跡　大量銅剣と同じ場所　銅剣と共に祭器としてセットで使われ同時に埋められた可能性大

22 銅鏡の鋳型初出土　福岡・須玖永田（すくえいた）遺跡　弥生時代後期の（仿製（ぼうせい）国産↔舶載製"中国鏡）「奴国」の青銅工房跡　全国で148出土　九州製と畿内製に2分、分布差が大和朝廷成立のナゾを解く一つのカギ

8月

1 日本一の大鳥居計画　桜井市・大神神社　高32m幅23m　新潟県弥彦神社ー高31m最上稲荷高27m

3 伊井大老は開国慎重論だった　朝廷の勅許を重視　彦根藩文書調査で判明

3 小早川正平（高山城15代当主）の討ち死に地島　根平田市に供養塔ー三原郷土会　天文12（1543）大内義隆に助勢尼子晴久と戦い敗る。21才で

6 語り継ごう福山空襲　遺族ら110人が手記

9 室町時代の海岸確認ー中世尾道遺跡調査　荷札など発見　小規模な埋め立のくりかえし

15 弥生後期の竪穴住居跡　尾道・天満原遺跡（高須）石のやじり、土器の破片みつかる。大田貝塚（縄文人骨出土）、大元山古墳（前方後円墳）とのかかわりが注目される

15 「終戦詔書」草案みつかる　神辺町

16 「御番所（家老屋敷の受付所）」跡など発見 ー福山城遺構調査ほぼ終る

17 新らたに銅矛16本出土 ー島根・荒神谷遺跡
九州・四国で発見されている、山陰では初　銅鐸と銅矛が同時に出土したのは初めて。土中に保管して必要な時掘り出したか。

18

22

29 最大の丸木舟出土　長崎・熊野神社遺跡
縄文期7m以上か　大陸との交流解明に期待

31 縄文晩期（2300～2400年前）の水田せき　本州で初めて確認　茨木・牟礼遺跡　耕作人の足あと30以上　福岡・板付遺跡について2番目へ9/7に続く

31 縄文人は"のんべえ"　巨大酒がメ出土 ー石川・真脇遺跡

31 帝釈峡遺跡群発掘調査　今夏は終る　観音堂、弘法滝両洞くつより大量の獣骨、土器片出土

9月

6 弥生後期の墓から銅鐸 ー桜井・大福遺跡
墓から出土したのは初　「目的」論争に一石

7 日本最古？の水田　茨木・牟礼遺跡　水田用せき2基のうち1基は2600年前のもの　大陸から渡来した稲作技術が北九州とは別のルートで畿内に伝わったか　縄文水田最古の茶畑遺跡（唐津市）より古いが同時期で規模は大

7 NEWS最前線　荒神谷遺跡の特集

9 「すりばち」のルーツ　白鳳時代の倉吉・観音堂遺跡

13 広範囲な弥生後期住居跡　御領遺跡調査終る
これまでに竪穴式住居跡等発見

14 最古？の前方後円墳　和歌山・秋月遺跡（9/19関連）
前方部の長、幅各10m　高1m

18 高松城水攻め　実施勉強　岡山県灘崎中学校
城周辺から水がメ、軒丸がワラ、土器を採取

26 朱塗り石棺発掘 ー奈良・藤ノ木古墳

27 飛鳥時代の巨大石室　聖徳太子妃の父か

29 三和の厂史年表を発刊
史跡を児童の教材に　先生12人の郷土史研究

編集後記

今回の企画を考えた時、会報のメンバー四人で「自分は何か大事件の現場に居たことがあっただろうか？」と話し合ってみたが誰も想いつかず、唯一小学生の時東京に住んでいたY氏が、オリンピックでマラソンのアベベ選手が走ってくるのを「こーんな近くで見た」というのが事件らしい事件であった。平和な時代において何かしら事件の現場に身を置くというのは　かくも難しいことであるらしい。

しかし　そうではないのではないかという気も一方ではする。社会が高度化すればする程ひとつの事件はそれのみではおさまらず、いろんな形で私らの日常に関係してくるはずだからである。要はそれらに対して憤ったり悲しんだり心ときめかしたり　そういった心のアンテナを私らがいつまでも張りめぐらしておけるかどうか　そんな生き方が出来るかどうか　といった問題であるようにも想われる。だから言うも気恥しいことではあるが、もし30年～40年後今と同じことを問われたなら「私にとってのへ事件〉とは『備陽史探訪の会』に属したことです」と答えたい。それがへ忌わしい悪夢〉ではなく、へ輝かしい過去〉でありうる様な会であり続けてほしいと思う。以下は「お遊び」です。

「おじいちゃんはね、若いころ創立間もない備陽史探訪の会へ入ってたんだよ。」

「えーっ、あの数々の文化人を生み出し今や日本の文化の一翼を担うとまで言われる備陽史探訪の会に　おじいちゃんが！？」

「本当じゃよ　会報にだって何回も原稿を書いたりしたもんだ。」

「うっそー、あの会の会報は載せてもらうだけでものすごい名誉で、一回載せてもらえたら一生食っていけると言われてるんだよ」

「おじいちゃんの若い頃は　どうか原稿を書いて下さいって言っても仲々みんな書いてくれなくてな、仕方なくいつも自分で穴うめしとったんじゃよ、ふわっ　ふわっ」

てなことにならねえかな　ちきしょう。（東）

行事予定

12月22日(日)　午後2時～　於市民会館

歴史講演会

「歴史の変革期における宗教

―鎌倉時代と幕末の宗教（しゅうきょう）―」

講師　堤勝義氏

そのあと5時半から

忘年会です・別折試まれたし・